

# 平成29年度事業報告書

平成29年4月1日～平成30年3月31日

特定非営利活動法人 ザ・ピープル

## 1. 事業実施の方針および成果

平成29年度については、本会が現在置かれている社会状況を踏まえ、以下のような重点目標を掲げ、事業の推進に法人全体として取り組んできた。それぞれの目標についての実施状況と成果についてまとめる。

- (1) 古着リサイクル事業の地域内循環に向けたビジネス性の確立
- (2) 日本チャリティーショップ・ネットワーク内での活動の連携促進
- (3) 古着を素材とするリメイク品・反毛手法を生かした手工芸品による事業展開の促進
- (4) 海外の団体とつなぐ活動の展開
- (5) 東日本大震災後の復興支援にかかる諸事業実施
  - ① 小名浜地区復興支援ボランティアセンター運営とそれに伴う諸事業
    - 復興庁「心の復興事業」 みんなの畑野菜で共に饗する生きがい交流プロジェクト
    - 福島県ふるさとふくしま交流・相談支援事業補助金（県内避難者・帰還者支援事業）  
福島県いわき市を中心とした「置き去りゼロ」チャレンジ事業 STEP2
  - ② 「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」運営によるいわきの農業活性化  
及びオーガニックコットン製品開発に関する取り組み
    - 地球環境基金助成事業 福島浜通りでの帰還を後押し コットンベルト実現化事業
  - ③ フードバンク事業
  - ④ NPO法人みんぷくとの連携による事業
  - ⑤ 被災体験に基づく情報発信に関する事業と若者に対する復興に対する意識啓発を目的とする事業
  - ⑥ その他被災者支援のために有効と考えられる事業
- (6) 本会活動の拠点整備事業

### (1) 古着リサイクル事業の地域内循環に向けたビジネス性の確立

古着リサイクルの基盤事業に関しては、提供頂く古着の量と地域内でリサイクルできる古着の量並びに反毛工場への搬出量とのバランスが崩れ、倉庫に仕分けできないまま山積みになった古着が溢れて仕分け済みの古着との判別が困難になるという状況に陥った。夏場、コヤマドライビ

ングスクールからの定期的なボランティア来訪があり、一時的には改善が見られたが、その効果は一時的なものに限られた。仕分け担当スタッフ数も減少しており、このスタッフ確保が急務となっている。また、回収並びに搬出前のフレコンバッグ詰め工程担当スタッフが相次いで年末に退職するといった事態にも見舞われ、古着リサイクル事業の根本を揺るがす状況に至った。この部門担当スタッフの確保を1名行ったが、不足分を補うまでは至らず、コットンチームによる定期的なサポートが必要となっている。こうした課題について、一日も早い改善が求められている。

古着リユース販売を目的とするチャリティーショップの運営に関しては、4月20日に津波被災エリアであるいわき市久之浜地区に設けられたコミュニティ商業施設「浜風きらら」への出店を行い、久之浜地区の女性2名をスタッフとして迎え営業を開始した。開店後夏期は一定の来客があったが、冬期に関しては施設全体への来場者数が伸び悩み続けた。加えて、鮮魚などを販売していた入居テナント撤退という状況も生起し、初年度から苦しい経営状況に直面した。

一方、タウンモールリスポの閉館に伴い、1月15日でリスポ店の閉店という状況も迎えざるを得なかった。その対応として、活動拠点整備事業に合わせて新店舗を路面店として開設。当初はその店舗の存在に気付いて貰いにくいといった課題もあったが、徐々に固定客の数も増え、ある程度安定した収益を確保し始めている。これは店舗運営に関わるスタッフの不断の努力の賜物であると言える。

## (2) 日本チャリティーショップ・ネットワーク内での活動の連携促進

全国各地でチャリティーショップの運営という事業形態をもつ市民グループがネットワーク化を進め、日本チャリティーショップ・ネットワーク（共同代表 贄川恭子氏・新田恭子氏）として一昨年度より活動。本会も正式会員として参画している。本会では、その動きに合わせ、古着販売店舗をチャリティーショップと称し、一般的なりサイクルショップとの違いを明確に示せるよう心がけている。このネットワークの中で紹介されたWE21 ジャパン主催イベントへの出展や、ネットワーク主催のフォーラムへのスタッフ派遣を通して、相互交流と研修を重ねることができたことは大きな成果となった。

## (3) 古着を素材とするリメイク品・反毛手法を生かした手工芸品による事業展開の促進

PCC各店のうち、2店舗にリサイクル工房を併設。また残り2店舗においてもリメイク品の取扱いを定着させ、リメイク品の販売やお直しのサービス提供に力を入れた。これにより、各店の売上の20%近くをリメイク品またはお直しにより生み出すという、アップサイクルの形が定着している。リメイク手法の一つとして、古浴衣などを素材とする布ぞうり教室のクリンピーの家での開催も継続されている。

活動拠点整備に伴い開店した君ヶ塚店において、顧客の呼び戻しに大きな役割を果たしたのもまたお直しであり、本会のチャリティーショップにとって大きな武器に成長していると言える。

## (4) 海外の団体とつなぐ活動の展開

平成27年度の地球市民フェスティバル・太平洋島サミットでの島嶼国との交流という成果を単年度で終わらせることのないよう、いわき市からの強い要望を受けてミクロネシアを対象とする支援事業案を作成。自治体国際化協会の支援を受けたいわき市からの委託事業として平成28年度実施した。この事業内容をもとに、今年度はJICAに対する助成事業案を作成し、申請を提出した。しかし、採択は得られず、継続申請に留まった。

また、タイ支援活動に関しては、これまでの奨学生がチェンマイ大学を卒業したことから、この元奨学生と連携する形で、ナーン県のチュムチョムシラレーン中学卒業生のうち優秀な2名の生徒に向けた奨学金供与を開始した。

## (5) 東日本大震災後の復興支援にかかる諸事業実施

### ① 小名浜地区復興支援ボランティアセンター運営とそれに伴う諸事業

本年度半ば、本会の活動拠点の整備に伴い、ボランティアセンターの名称を変更し「小名浜ボランティアセンター」とした。事業内容としては、これまでの小名浜地区復興支援ボランティアセンターのものを継承し、(社)いわき市社会福祉協議会からの委託事業として、「ぼくとわたしの海辺のクリスマス」の開催も行った。本会独自の事業は以下の通りであった。

### ● 復興庁「心の復興事業」 みんなの畑野菜で共に饗する生きがい交流プロジェクト

原発避難者や帰還者の交流促進を目的として、ふくしまオーガニックコットンプロジェクトの圃場のうち仮設住宅や復興・災害公営住宅に近い小名浜上神白の圃場において「みんなの畑」を継続して設置。その一角に「みんなの畑菜園」を設け野菜の栽培とその野菜を活用した交流事業の開催を進めた。

野菜栽培の活動は、単発イベントのように一過性のものではなく、毎日の手入れが求められる。その手入れをほぼ毎日のようにするために畑に足を運んでくれる避難者のメンバーが出てくれたことで、避難者の心身両面での健康に関して成果を残すことができた。このメンバーは大熊町出身者と富岡町出身者であり、そのうち富岡町出身者は避難生活の中で妻を亡くし独居状態にある高齢男性であることから、まさに本事業の想定していた対象者へのアプローチが行われたといえる。

この「みんなの畑菜園」での収穫物を食材として活用しながら行う交流会については、隣接する市営・県営住宅に住む異なる被災状況にある人々の出会いと交流の機会を設けるといった意味合いが深かった。その点では、毎回双方の立場にある多くの参加者を集めることができた。

第1回目 10月22日	「公家千彰フラメンコショー&ランチ会～ランプシェード作り～」 プロのフラメンコ披露と昼食を交えた交流 別会場ではワークショップ
第2回目 11月7日	「包丁研ぎボランティア&ランチ交流会～ランプシェード作り～」 地域外の包丁研ぎボランティア活動と昼食を交えた交流 WS
第3回目 12月5日	「夏目銀之助の腹話術&ランチ交流会～ランプシェード作り～」 腹話術師の夏目銀之助氏による芸を披露と昼食を交えた交流 WS
第4回目 1月21日	「さいたま県チーム農援隊そば打ち in 交流会～ランプシェード作り～」 そば職人のそば打ちパフォーマンスと昼食を交えた交流 WS
第5回目 3月10日	「関西からの元気玉公演 2018 人形浄瑠璃 in 交流会」 人形遣い勘緑一同による浄瑠璃人形の講演と昼食を交えた交流 WS

昼食の調理にも、食材として「みんなの畑菜園」の野菜が活用されただけでなく、双葉郡内の郷土料理を避難者の方に調理していただくといった仕掛けが功を奏し、会場に集まった市営・県営住宅双方の入居者が、調理してくれたメンバーに感謝の言葉を口に出している情景が見受けられ、これをきっかけに個人的な交流が始まるケースもあった。

● 福島県ふるさとふくしま交流・相談支援事業補助金（県内避難者・帰還者支援事業）  
福島県いわき市を中心とした「置き去りゼロ」チャレンジ事業 STEP 2

以下の二つの取り組みを実施した。

**取り組み1 ふくしまオーガニックコットンプロジェクトによる農業体験**

コットン栽培を避難先・帰還地の双方で行うことにより、様々な立場の人が農作業を通して交流する場づくりを進めた。

避難先でのコットン栽培は、「みんなの畑」（いわき市小名浜上神白）と名付けられた避難者が積極的に栽培に関わる圃場で進められた。事業開始前の5月12日からスタートして2月9日の最終回迄、10ヶ月に及ぶ栽培期間を通して農作業を通じた交流が継続開催された。

7月23日には、暑い中での農作業への慰労の意味で夏祭りを催し、収穫のタイミングである11月25日には、収穫祭を開催した。参加呼びかけ対象としては、「みんなの畑」参加者、いわき市営住宅に住む地震・津波被災者、県営住宅に住む原発避難者、地域住民、県外避難者交流会の場を通して参加を呼びかけた県外避難者、首都圏からのボランティア、研修目的で来訪した大学生など。多様な人々が、共通な体験である農作業に加わり、昼食を共にし、自然エネルギーで提供される音楽やゲームといった楽しみを分かち合った。

こうした農作業を通じた交流は、通常のサロン活動では交流機会に恵まれない高齢の男性たちにとっても参加意欲を高めてもらえるものとなっている。また、農作業と交流機会の組み合わせの中から、「みんなの畑」の活動に参加希望を申し出るいわき市営住宅の入居者も現れ、コミュニティの課題解決に向けた手応えを感じつつある。

**取り組み2 収穫されたコットンを素材とする手仕事を仲立ちとする交流事業**

昨年度、復興庁の助成を受けて実施した事業の中で、誰でも手軽に原綿から糸を紡ぎ出すことができる道具「チャルカ」を開発。今年度は、これを実際に活用してものづくりに着手するとともに、「チャルカ」による糸紡ぎを介在させることで立場や居場所の異なる人たちにとって「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」に関わる共通の体験を生み出し、福島への思いを寄せてもらえる機運を醸成しようとして、事業を組み立てた。この糸紡ぎには、柳生地区でのコットン栽培の中から生まれた織姫の会メンバーが主導的な役割を果たしたほか、首都圏で開催されるイベントの来場者や企業のボランティア、これまで全く本プロジェクトと接点のなかった糸紡ぎの愛好者まで500名を超える協力者があった。

更に、「チャルカ」で紡いだ糸を素材としてランプシェードを制作し太陽光でLEDライトを灯すイベントを企画し、3月11日、震災から7年目のメモリアルデイに実際の津波被災地であった久之浜地区において開催。これは皆で福島産の糸を紡ぎ、太陽光発電の講習会なども組み合わせながら共同の作品づくりを行うもの。ライトアップイベントでは、地域住民に共同で灯した明かりを披露した。このイベントは、「つむぐ ともす かなでる ふくしまメモリアルライトアップ2018 in 久之浜」と名付けられ、津波被災地に足を運ぶ市民や隣接する双葉郡からの来訪者、また首都圏で実際の糸紡ぎに参加したボランティアメンバーなど1300名の来場者を集めた。これにより、多くの賛同者を得ることができたとの感触を得ている。なお、このイベントの様子はYOU TUBEにもアップされている。

② 「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」運営によるいわきの農業活性化  
に関する取り組み

● 地球環境基金助成事業 福島浜通りでの帰還を後押し コットンベルト実現化事業

「ふくしまオーガニックコットンプロジェクト」でのコットン栽培が6年目となる今年度は、夏から秋にかけての長雨が災いし、昨年度1トンの収量があったにも関わらず、660kgに留まる状況で終わった。なお、この栽培にはパタゴニアからの栽培協賛が継続して得られた。

地球環境基金からの助成を受けて進めた双葉郡内でのコットン栽培の広がりは以下の通り。

双葉郡広野町	これまでも本会による栽培指導の下 NPO 法人広野わいわいプロジェクトが中心となったコットン栽培が実施されてきている。
双葉郡檜葉町	これまでも本会による栽培指導の下 NPO 法人広野わいわいプロジェクトが中心となったコットン栽培が実施されてきている。
双葉郡富岡町	帰還後初めての年度ということもあり、思うように運ばなかった。これは、栽培地として選定した一般住宅の除染後の庭地では土壌が栽培に不適で、有機肥料を加えたがその成果を見ることはできなかった。震災前は庭に野菜畑を設えていた住民からの申し出であっただけに、本人の落胆ぶりは大きかった。次年度は栽培地を変更して取り組むことになっている。収量は0に近い。
南相馬市	栽培にかかわりを持ったのが農家民泊を手掛ける農家と老健施設の開設準備を進めている方であった。それぞれ忙しい中ではあるが、こまめに栽培の手入れを行ってくれたこともあり、良質のコットンを収穫することができた。
いわき市	コットンベルトの起点として、これまでの経験に基づき形成されてきた流れに乗った管理が行われた。しかし、そのことが十分に収量には反映されず、平成28年度比32%の収量減という結果となった。これは、天候不順に起因するもので、農業である以上如何ともし難い部分であると考え。反収は26kg程度となった。新井和夫氏を講師として招いた学習会を催し、次年度に向けた対策を共有している。

更に、5月9日、GEOCを会場として、ふくしまオーガニックコットンプロジェクトの報告会を実施。首都圏の関連団体のメンバーや企業のCSR部門担当者など80名を超える参加があった。この中で、本事業について紹介し、次年度全国コットンサミットをふくしまいわきで計画していることを表明。

兵庫県加古川市において今年度開催された「全国コットンサミット in 加古川」にスタッフと共に出席し、事業運営全般に関する情報収集を実施した。このサミットの中では、昨年に引き続き日本オーガニックコットン協会から「オーガニックコットンアワード 大賞」を授与され、ステージ上でふくしまオーガニックコットンプロジェクトの取組説明を行った。更に、次年度開催地ということで紹介を受け、大会旗の引き継ぎも行った。これまで6回は行政手動で開催されてきた全国コットンサミットが次回福島いわきでは民間主導で行われることが紹介された。

次年度のコットンサミット開催に向けた実行委員会は、行政も加わった形で立ち上げる必要があると考え、ある程度その下準備を行うための準備会を7回にわたって開催。その中で、サミット開催経費が地球環境基金助成のみで賄えないことが確認されたため、行政の指導のもと福島県への助成申請を行うこととした。これにより、サミット実行委員会は無事組織化できた。資金的課題も解決できた。

他に、都市農村交流についてもその可能性を検討する事業を地球環境基金助成事業の中で実施。その成果をもとに、柳生地区での都市農村交流拠点整備の事業案を作成。住友商事東日本大震災フォローアップ支援事業の採択を得ることができた。事業期間平成 30 年 1 月～31 年 12 月。

### ③ フードバンク事業

ジャパンプラットフォーム（JPF）の助言をもとに、震災起因などの生活困窮者への支援事業として、フードバンク事業を次年度立ち上げるための準備期間として、フードバンク岩手（盛岡市）、アGain（仙台市）への視察研修にスタッフを派遣。関係する行政機関へのヒアリングや連携先として想定される連携組織等との打ち合わせを重ねた。

### ④ NPO 法人みんぷくとの連携による事業

NPO 法人の副理事長を本会理事長が兼務していることから、みんぷくの運営に対する箴言など、みんぷくの事業運営のための体力を削ぐことのないような方向性を探るアドバイスを実施した。

### ⑤ 被災体験に基づく情報発信に関する事業と若者に対する復興に関する

#### 意識啓発を目的とする事業

本会へスタディーツアーでの被災地視察を希望するガイド要請があることから、出来る限り対応した。特に教育旅行生に対しては、受け入れに工夫を重ね、高い評価を得た。

### ⑥ その他被災者支援のために有効と考えられる事業

特段実施しなかった。

## (6) 本会活動の拠点整備事業

本会の事務局並びに店舗が入居していたいわき市小名浜の商業施設、タウンモールリスポの 1 月 15 日閉館に伴い、活動拠点の移転に迫られた。半年をかけ検討を行ったが、手頃な借地物件を見つけることができず、結局小名浜地区復興支援ボランティアセンターとして利用してきた借地に設置しているスーパーハウスの増築・整備を行い、店舗並びに事務局としての機能を整備することとした。それにあたり、建設費用が予想を大きく上回ることが判明したため、役員借り入れでも賄いきれない部分に関して、クラウドファンด์ FAAVO 磐城国を活用。10 月 1 日から 12 月 15 日までの期間支援を呼びかけた。それに応え、地域内外 230 名・組織から支援の提供を頂き、目標額の 182%にあたる 3,657,000 円を達成することができた。店舗・事務所・倉庫棟の整備が終わり、FAAVO 支援者を招く披露の会を 3 月 25 日に開催した。

## 2. 事業の実施に関する事項

### (1) 特定非営利活動に関する事業

定款の事業名	事業内容	(A)実施日時 (B)実施場所 (C)従事者の人数	(D)受益対象者の範囲 (E)人数	支出額 (円)
古着リサイクル関連事業	市内外から家庭で不要となった古着を回収。仕分け等リサイクルの基盤となる事業を継続実施した。	(A)常時 (B)いわき市内各リサイクルボックス いわき市小名浜志賀倉庫・諏訪倉庫 (C)9名×20日×12月	(D)一般市民ならびに全国の賛同者 (E)不特定	7,381,638
	エコウルリサイクルを推進するため反毛関連工場へリユースできない古着を定期的に搬送した。 リメイク品の製作を常設店舗に併設した工房2ヶ所を実施しアップサイクルに努めた。 反毛製品化事業に関しては機械不調のため期半ばまで実施できなかった。	(A)発送準備：常時 反毛加工：機械不調のため期半ばまで停止 発送：毎月2回 リメイク：常時 (B)いわき市内小名浜ファイバーリサイクル倉庫・志賀倉庫・工房ぴ〜ぶる(PCC大原店内・リスポ・君ヶ塚店内) (C)発送：1名×24回 反毛：1名×5回 リメイク：3名×15日×12月	(D)一般市民ならびに全国の賛同者 (E)不特定	5,907,936
	常設・臨時バザーを出店し、古着を地域内でリユース活用する機会を身近なものとする事業を展開した。	(A)常時・お下がりバザーについては9月10日に実施。 (B)いわき市内チャリティーショップ各店・イベント会場 (C)常設バザー30名	(D)一般市民 (E)不特定	10,509,871
在宅障がい者自立支援事業	障がい者の施設にウエス材を提供した。 不就労の若者にジョブトレーニングの機会を提供した。	(A)常時 (B)いわき市内小名浜志賀倉庫・市内外での綿花栽培地等 (C)14名	(D)いわき市内障がい者関連施設・いわき若者サポートステーション利用者 (E)25名	646,500

海外生活支援・海外教育支援事業	前年度供与経費で事業実施したため表面的な事業の実施はなかった。	(A) (B) (C)	(D) (E)	0
情報発信事業	会報の発行とHP管理により活動情報を広く一般市民に提供した。 エコプロダクツ展など環境系イベントの出展を通して首都圏の住民にもアプローチを行った。	(A)会報：4回・HP：常時／出展：12月8～10日ほか (B)会報・HP：事務局／出展：東京都江東区東京ビックサイトほか (C)会報：各号4名／出展：4名	(D)一般市民・首都圏民 (E)不特定	140,022
ワークショップ・講演会・市民啓発事業	リサイクルを進める手法として布ぞうり教室を開催した。	(A)布ぞうり教室：6月9日・8月25日・11月10日・3月9日 (B)布ぞうり教室：クリンピーの家 (C)10名／3名	(D)一般市民 (E)不特定	0
ボランティア活動体験・研修受入れ事業	中高生ボランティア体験受入れを「いわきアカデミア事業いわき発見ゼミ」の一環として行った。	(A)7月18日・12月1日 (B)上神白コットン畑・リスポホール・小名浜まちづくりステーション (C)5名	(D)いわき桜ヶ丘高校・磐城高校生徒 (E)80名	10,000
関係団体との交流・連携・協力事業	いわき市民間国際交流・協力団体連絡会事務局として地球市民フェスティバルの運営を行った。	(A)常時 (B)事務局 (C)2名	(D)いわき市内国際交流・協力関係団体 (E)10団体	9,560
被災者支援に関する事業	東日本大震災救援・復興支援の事業として、小名浜地区復興支援ボランティアセンターを運営。そこを拠点として、「ぼくとわたしの海辺のクリスマス」「復興庁「心の復興事業」みんなの畑野菜で共	(A)常時 (B)事務局・小名浜地区復興支援ボランティアセンター (C)専門スタッフ2名・ボランティア4名	(D)東日本大震災被災者並びに地域住民・首都圏からの視察客 (E)不特定	6,366,876



	に饗する生きがい交流プロジェクト」他の事業を実施した。			
第一次産業の活性化に関する事業	ふくしまオーガニックコットンプロジェクト関連事業として、パタゴニアによる企業協賛を受けながら事業展開を進めた。地球環境基金による助成事業も進めた。	(A)常時 (B)事務局・市内外での綿花栽培地等 (C)専門スタッフ 3名・ボランティア等 30名	(D)市内農業従事者・原発関連の避難者・首都圏からのボランティア希望者 (E)3,500名	10,497,302
その他の事業	本会活動推進のために必要な事業			0

(2) その他の事業

定款の事業名	事業内容	(A)実施日時 (B)実施場所 (C)従事者の人数	(D)受益対象者の範囲 (E)人数	支出額 (円)
会員研修会・研修旅行の開催	研修会は実施しなかった。	(A) (B) (C)	(D) (E)	0